

母親を含む援助チームによる相談室登校生徒への支援

茂泉ひとみ・宮本正一

(岐阜県教育相談員・岐阜大学教育学部)

Forming a support team including mother to support a truancy student

Shigeizumi, Hitomi (School counselor)
Miyamoto, Masakazu (Gifu University)

本研究は、学級に入れず相談室登校をしている女子中学生に対して、母親を含む援助チームを結成し、協力して支援を行うことにより学級復帰を果たした事例研究である。

学校生活において子ども達は、学習面、心理・社会面、進路面、健康面にわたって多様な問題を抱えている。これらの問題に対して学級担任の教師が一人で児童生徒を支援するのではなく、複数の援助者が協力してチームを組み、児童生徒を支援していくことが必要である。文部科学省の「少年の問題行動等に関する調査協力者会議報告：心と行動のネットワーク」(2001)において、単なる情報の交換である「情報連携」から相互に連携して一体的な対応を行う「行動連携」へと一歩踏み出した連携の推進が提言されている。この行動連携は不登校への支援においても重要であり、教育相談「体制」の充実、特に、学校内外の援助資源を生かした援助体制の確立と組織整備、家庭との連携による支援が有効であることを述べている。スクールカウンセラーが多くの学校に配属されている現在、子ども達の援助ニーズに応えるためには教師と学内外の援助者がどのように協力して援助を行うかが重要な課題である。

しかし行動連携の重要性が叫ばれる背景には担任教師による問題の抱え込み(佐古, 2006)やこれまでの個人の経験にだけ頼っていて組織的な取り組みが難しい(小島, 2002)という問題があり、学校と関係機関等との連携が不十分であっ

たと指摘される事例が後を絶たない(文部科学省, 2004)状況がある。

行動連携を推進していくためには学校心理学に基づく心理教育的援助サービスの理論体系(石隈, 1999)が多く示唆を与えてくれる。学校心理学では複数の援助者による援助チームが効果を上げると推奨している。ここで援助チームとは「複数の援助者が、対等な立場で援助目標や援助計画を協議し、それに照らし合わせて役割分担を行いながら援助を進めるもの」(宇留田, 2004)であり、援助の形態でもあり、同時に援助の主体でもある。

石隈(1999)は3種類の援助チームを区別している。つまり、①特定の児童生徒に対して一時的に編成され、問題解決とともに解散される個別の援助チーム、②学校の心理教育的援助サービスの充実を目指して恒常的に機能するチーム、③学校全体の教育システムの運営に関するチームである。本論では①の一時的に編成された特定の個人に対するチームを編成した。

援助チームに関する研究は学会発表(田村・石隈, 1998; 新福ら, 2000; 半田ら, 2000; 横島ら, 2000; 松本・淵上, 2009)だけでなく、しだいに研究論文の形で蓄積されてきた。

田村(2003)はスクールカウンセラーによるコア援助チームの実践事例を取り上げ、心理教育的援助サービスについて考察している。コア援助チームとは「教師・保護者・コーディネーター(スクールカウンセラーなど)が核になり、他の援

助資源を活用しながら定期的に援助する心理教育的援助サービスの形態」である。コア援助チームでは、それぞれの異なった専門性や役割を生かしながら子どもの状況について検討し、今後の援助について話し合い、援助資源を生かして援助を行う。実践事例ではコア援助チームで行ったコーディネーションや相互コンサルテーションは有効であることが示唆された。さらに、援助資源の把握、アセスメント、援助の立案などのために作成した援助チームシート・援助資源チェックシートも有用であることが示された。

秋光・白木 (2010) はチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感にどのように影響するかを検討している。研究1では養護教諭の職務満足感を包括的に測定する尺度の作成を試みた結果、「心の支援活動の実践」「養護教諭としての存在感の実感」「保健の授業・指導の実践」「子どもとの信頼関係の構築」「養護教諭としての専門性の発揮」「教職員との信頼関係の構築」「保護者との信頼関係の構築」という7つの下位次元から構成される尺度が作成された。研究2では養護教諭のコーディネーション活動を、チーム援助に関わる他の校内分掌担当者と比較した結果、「子どもの心身の状態把握」では援助チームの中で中心的な役割を担っており、それ以外のコーディネーション活動の程度は、生徒指導を除く他の分掌担当者と同程度であることが示された。さらに、養護教諭が援助チームの中でコーディネーターとして活発に活動することは、養護教諭の職務満足感全般に対して正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。これらの結果に基づき、養護教諭のコーディネーターとしての積極的な関与を促進する方策が考察されている。

山口・吉田・石川 (2009) は、中学校教師へのインタビューを題材として、「中学校教師のチーム援助モチベーションを促進する要因は何か」を実践現場からのデータに基づいて検討している。ここでは教育相談主任、養護教諭、学級担任との半構造化面接を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによりその内容を分析している。その結果、15の概念が見出され、それはさらに【Iリーダーシップ】【II組織】【III

雰囲気】【IV意識】の4つのカテゴリーにまとめられた。結果からみると、チーム援助モチベーションの促進要因は、ハード面の《組織》およびソフト面の《リーダーシップ》《雰囲気》《意識》であることが明らかになった。そして、《リーダーシップ》が《組織》の【柔軟なチーム援助】【システムの構築】および《雰囲気》に直接的に影響を与えていた。さらに、《雰囲気》は《組織》の【役割分担によるチーム援助】に影響を与え、《意識》とは相互に影響を与えていた。チーム援助モチベーションが促進されるためには、組織が整えられることは大切であるが、その組織がより効果的に機能するためには、それを動かす教師集団の雰囲気や意識が大切であることが確認されている。

丸山 (2009) は援助チーム活動における情報収集と仮説生成のプロセスについて、コーディネーションの役割が期待されるスクールカウンセラーはどのような準備をしておくべきかを考察している。

平野 (2008) はオーストラリアの多文化保育に関する意識と援助チームの実態を紹介している。

瀬戸・石隈 (2003) は中学校における援助チームに関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限について検討している。瀬戸・石隈 (2002) が作成したコーディネーション行動尺度とコーディネーション能力・権限尺度を用いて、スクールカウンセラー配置中学校148校の学年主任、生徒指導主任、教育相談担当の長、養護教諭、スクールカウンセラーを対象として調査を行い、その結果を分析している。その結果、中学校におけるコーディネーション行動は、個別援助チームレベルでは、説明・調整、保護者・担任連携、アセスメント・判断、専門家連携の4因子、システムレベルでは、マネジメント、広報活動、情報収集、ネットワークの4因子から説明できた。またコーディネーション能力・権限は、状況判断・援助チーム形成、役割権限、専門的知識、話し合い能力の4因子で説明できた。能力・権限がコーディネーション行動に与える影響について分析した結果、役割によって影響のあり方が異なったが、役割権限

は役割を超えて影響力が強かった。

田村・石隈 (2003) は教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開を取り上げ、「援助者としての保護者」に焦点をあてている。ここでは、不登校生徒15例に対する援助チームの実践を分析している。その結果、援助チームは次の4タイプに分類された。タイプ1(典型例)…担任・保護者・スクールカウンセラーの3者で相互コンサルテーションを行う。タイプ2…担任・スクールカウンセラーの2者が相互コンサルテーションを行いながら、それぞれ保護者へコンサルテーションを行う。タイプ3…担任がスクールカウンセラーと相互コンサルテーションを行いながら、担任が保護者へコンサルテーションを行う。タイプ4…スクールカウンセラーが担任と相互コンサルテーションを行いながら、スクールカウンセラーが保護者へコンサルテーションを行い、同時にカウンセリングも行う。このように、担任・保護者・スクールカウンセラーが、核(コア)となって援助を主導し、相互コンサルテーションおよびコンサルテーションを行い、子どもへ援助する形態を「コア援助チーム」と定義して、学校教育において援助チームのモデルのひとつとして意義があることを示唆している。

田村・石隈 (2007) は、保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するかを母親の手記を質的に分析することにより、母親がクライアントから子どもの援助のパートナーとなる心理的変容過程のモデルを提出している。

川口 (2003) は小学校で6年間、現職教員による組織的な教育相談の常時活動を行ってきた実践を通して、そのあり方や問題点について考察している。

瀬戸 (2010) は学校におけるチーム援助のコーディネーションに関する研究の動向を展望している。

母親を含む援助チームの事例研究

援助チームを編成して不登校や保健室登校の児童生徒を支援する場合、保護者、特に母親を

チームのメンバーとしていかに組み込むかが大きな課題である。つまりお互いに子どもの幸せを願って協力する(川口, 2002)という目標で、保護者を生徒への援助を提供するパートナーとして、援助者側に位置づけることになる(田村・石隈, 1998)。保護者は家庭での様子や生育歴、家庭状況などを知る重要なメンバーになる(丸山, 2009)。そして保護者を含む援助チームは有効である(田村・石隈, 2003)とされている。そこでここでは具体的事例を取り上げて、援助チームの機能を検討したい。

(1) 教育援助の対象

A子(中学2年女子)。両親と弟(小学5年)の4人家族である。父は自営業、母は会社員の共働き家庭である。

(2) 教育援助を行った場所

A子が通学している中学校の相談室である。

(3) 期間

X年5月よりX+2年3月まで

(4) 教育援助開始時における対象者の問題の概要

担任の話によると、A子は1年生の夏休み明けから、時々体調不良を訴え、学校を休むようになった。登校して教室に入っても、保健室に行くことが多くなった。学級では、班長を務め、しっかりしていて、明るい印象であったという。同級生とのトラブルも無く、A子本人も「体調が悪いから」と言うため、体調が回復すれば、以前のように教室でがんばることができるのではないかと思われていた。

しかし、今年2年生になっても相変わらず休みがちであり、登校しても保健室へ行くという状態は変わらなかった。休みが多くなってくると学習面での遅れも心配された。保健室では学習のフォローが見込めないため、相談学級での学習も取り入れられていた。これらのことから、担任より、スクール相談員である第1筆者に対して、A子が何か悩みを抱えているのであればそれを軽減してあげたいこと、高校進学のことを考えなるべく教室参加を増やしたいこと、この両面を考えながら援助をしてほしいという依頼があった。

(5) 教育援助開始時における、対象の児童生

徒、学校、学級そして家族の環境などについての心理アセスメントの焦点、方法と結果

スクール相談員のA子への面接からは、以下のような情報が得られた。

A子は、1年生の時、班長をやっていたが、一部の男子が言うことを聞かなかった。そのうえ、班がうまくまとまらなるとA子の責任にされる。言うことを聞かない男子を憎いとさえ思ったという。それから学級に入ると、気持ちが悪くなるようになった。A子の責任感の強さが伝わってきたが、かなりのストレスを抱えているようであった。

家庭では、母親が正社員であるため帰宅が遅く、夕食は弟と一緒に近所の祖母宅で取ることが多い。祖母宅には母親の妹家族が同居していて、まだ幼い子どもが二人いるので、わがままは言えない。母親はフルタイムで働いていて、忙しいのがわかっているのに、グチを言って心配をかけたくない。父親は自営業で、家を空けることが多い。また、父親は弟を可愛がっているように見え、自分は甘えられない、というようにA子が学校でも家庭でも自分を表現できていないことがわかった。また、平日は塾に通い、家庭教師にもついている。土日は所属しているタレント事務所に通っていて、とても忙しいという。タレント活動は楽しく、同年代の仲間と会っておしゃべりできることは息抜きになっている。できれば中学・高校とも両立してやっていきたいということだった。

さらに、スクール相談員とA子の母親との面接からは、A子は中学1年の夏休み明けに、目まい、頭痛を訴えたため、脳外科、内科、眼科へ連れて行った。それらの病院では問題は見当たらず、精神科で、「仮面うつ病」と診断されたということがわかった。

また、「根本の原因は、母親である私にあるんです。」と言う。A子にさびしい思いをさせ、母親らしいことができていない。世の中の母親たちが優秀に見え、自分だけがダメな母親だと思う。自信がないので、「教室でがんばりなさい。」とか「勉強しなさい。」とかの励ます言葉も言えない。本当は、勉強をしてほしいし、高校に行ってもらいたい等、A子に関わることができていない

自分に自信が持てず、自分の思いが我が子に伝えられていないということがわかった。田村・石隈 (2007) は「子育てにおける疎外感・無力感・徒労感」と呼んでいる。

以上のことから、A子は「うまく班をまとめたい」など責任感が強いこと、高校でもタレント活動は続けていきたいという希望を持っていることなどが自助資源（内的リソース）として捉えられた。また、責任感の強さから、上手い場合につけられず、忙しい毎日に追われて、それがうまく解消されていないこと、父親・母親はA子に対して、受容的な態度をとることができていないことが理解できた。

(6) 心理教育的アセスメントに基づく教育援助開始時の教育援助の方針と計画

上述の教育援助開始時に行った心理教育的アセスメントに基づき、以下のような仮説を立てた。

- ① A子はこれまで、仕事で忙しい母親・父親に甘えられず、一人で我慢してきた。ストレスのはけ口が見つからず、ウツという症状が出たのではないか。
- ② 母親はA子に関わることができていない自分自身に自信を失っていて、気付いているものの、なかなか変わることができないのではないか。

これらの仮説をたてた時点で、第2筆者であるスーパーバイザーから今後の方針についてのスーパービジョンを受けた。A子の葛藤を軽減してあげるため「様々な職員がA子と接触し、受容的に関わること」A子の「母親に対しては、仕事を『やめる』『やめない』ではなく、A子に対して小さなことでもやれそうなことを手助けできるように、援助すること」という2つのアドバイスを得た。

チームによる援助を行うときに大切なことの1つは介入時期と方法である (川越, 2008)。特にはじめが肝心であると判断し、学年主任・担任・教育相談主任・養護教諭と援助チームを結成した。そして母親にも援助チームに参加してもらうことにした。援助チームの話し合いには石隈・田村 (2003) の援助チームシートを活用

することにした。第1回目の援助チームシートを図1に示す。ここでは以下の二点を共通の目標にして援助をすすめることにした。

- ① 担任はじめ教師は声掛けを心掛け、A子が安心して関わるができることを認識させる。
- ② 母親が自信を回復し、家庭でのA子の援助者となれるよう、母親の面接をスクール相談員が継続する。

(7) 教育援助の経過

第I期：母親の安定がA子の安定につながっていく（X年5月～X年10月）

6月の面接時、A子は「私は伝書鳩なんだ」と言う。母親が父親に何か聞こうとするが、父親が無視する。父親は、はなから母親と接触したがる。よって、A子が間に入り伝書鳩を勤めるということである。弟が中学生になったら、母は「離婚する」と言っている。A子が不和な両親の間に挟まれ、家庭の中で常に葛藤を感じていることがわかった。スクール相談員は常に緊張状態に置かれているA子の立場を理解し、何でも安心して話ができるよう共感的傾聴に努めた。

この頃、学校でのA子は、相変わらず教室にいと気持ちが悪くなると言い、時々保健室で休んだり、相談学級で勉強をしたりする生活だった。相談学級には、教育相談主任の他、空き時間の教師が訪れる。教室では手のかからない生徒として見られ、つい気を配られずに済んできたA子だったが、相談学級では教師たちと「体調どうや?」「今日は早く来れたなあ」など他愛の無い会話を交わす。また、眼帯をしたり、手に絆創膏を貼ったり、足に包帯を巻いて来ることがあり、「どうしたの?」「大丈夫?」という言葉かけを待っている様子がうかがえた。A子にとって初めて甘えられる場所ができたのではないだろうか。

この時期に行った母親との面接によると、母親からA子に「何が不満なのか聞かせて?」とA子に聞いてみたという。しかし、A子は「言いたくない」といって拒否したらしい。また、今までA子との関わりから逃げていた自分に弱みがあり、A子との会話は緊張してしまうとい

う。自分の母親（A子の祖母）からは「もっと母親らしくしなさい」と言われる。わかっているのだが、上手く関わるができない。小4の長男とは冗談を言ったり、叱ったり気軽に関わるができるのだが、という。スクール相談員は、スーパービジョンに基づいて、A子に対して母親が小さなことでもいいから、関わるができないか投げかけてみた。具体的には、「職場からでも時間の合間にメールをする」「夜寝る時、ゆっくり話を聴く」、等である。また、母親から「このままでは高校へ行けないのではないか」「好きなタレント活動をやめさせたほうがいいのだろうか」との不安に対して、スクール相談員は、高校には単位制の学校もあり、タレント活動との両立も可能であること、これから情報収集をしていきましょう、と伝えた。A子の訴える夫婦関係の不和については、母親から一切語られなかった。両親の不和のもと傷ついているA子の状況を考え、両親に対して、スクール相談員はどのように関わっていったらよいかスーパービジョンを受けた。スーパーバイザーからは、「お父さんは、どういうふうに関わっていますか?」程度の質問を母親に向けてみたらどうか、とアドバイスを受けた。また、援助シートを利用して、担任、教育相談主任を混じえて懇談を行った。第2回目の援助チームシートを図2に示した。

次回の母親面接時、父親のA子に対する関わり方を聞いてみた。その結果、父親はA子が通うこの中学校は市の研究校であり校則・規律が厳しすぎると批判的であり、A子に対しても「学校なんて行きたいときにいけばいい」「勉強なんてやりたいときにやりゃあいい」という態度であること、対外的（地域のイベント活動等）には積極的だが、家庭の中では母親がどんなに忙しそうにしても手伝うことはなく、家庭に関心がない様子である、ということがわかった。

夏休み明けの母親面接時、前回の面接時にスクール相談員からの具体的なアドバイス（「職場からでも時間の合間にメールをする」「夜寝る時、ゆっくり話を聴く」）を実践し続けてみた。すると、どんどんA子がいろいろな話をしてくれるようになった。私自身も「ああ、これでいいん

【石隈・田村式援助チームシート自由版】 実施日： 年6月27日(金) 15:00~16:00 第 1 回
 次回予定： 第 回
 出席者名：母親，担任，教育相談主任，スクール相談員
 苦戦していること(学級へ入ることができない)

児童生徒氏名		学習面	心理・社会面	進路面	健康面
年 組		(学習状況)	(情緒面)	(得意なことや趣味)	(健康状況)
担任氏名		(学習スタイル)	(ストレス対処スタイル)	(将来の夢や計画)	(身体面の様子)
先生		(学力)	(人間関係)	(進路希望)	
		など	など	など	など
情報 の ま と め	(A) いいところ 子どもの自助資源	・相談学級では真面目に学習に取り組む	・責任感が強い	・高校進学を希望している	・運動面では問題ない
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ	・学級に入れないため学習進度が遅れていく	・クラスの仲間や両親に気がつかいすぎて疲れている	・高校とタレント活動は両立できるのか ・保護者の意向はどうか	・めまい，頭痛がある ・教室にいると気分が悪くなる ・手に絆創膏，足に包帯を巻いて登校
	(C) してみたいこと 今まで行った，あるいは，今行っている援助と，その結果	・相談学級に訪れる職員が学習を援助する	・気持ちを言えるようにカウンセリングを実施した	・担任と進路について話した	・かまってほしいあられわれかもしれないので，声かけに心がける
援助 方針	(D) この時点での目標と援助方針	<ul style="list-style-type: none"> ・何がストレスなのか気持ちが言えるようにする ・学習は相談学級で援助していく ・保護者を援助者となれるよう保護者の不安を支える 			
援 助 案	(E) これからの援助で何を行うか	①相談学級での学習の援助	①ストレスを言葉であらわせるようにカウンセリングの実施	①進路についての情報提供	①体調を気遣う声かけ
	(F) 誰が行うか	①相談学級を訪れる職員	①スクール相談員	①担任	①すべての職員
	(G) いつからいつまで行うか	①今日から教室に入れるまで	①今日から卒業まで	①折をみて	①今日から卒業まで

参照：石隈利紀・田村節子共著『石隈・田村式援助シートによる援助入門—学校心理学・実践編—』図書文化社
 石隈利紀著『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—』誠信書房
 (c)Ishikuma & Tamura 1997-2003

図1 第1回目の援助チームシート

だ」と自信が持てるようになってきた、ということであった。A子と母親の間に信頼関係ができてきたようであった。また、インターネットで単位制高校を調べたら近くにあることがわかって安心したと言う。母親は子どもの問題を肯定的に捉えられるような「気づき」を得たようであった。田村・石隈(2007)は「心理的な揺れを伴った軌道修正」と呼んでいる。子どもの状況への新しい見方を受け入れ、関わり方を変えていった。

その頃、A子は相談学級と教室の往復をしていたが、表情が明るくなり教室参加が増えてきた。母親との関係が良好になったことがA子の安定につながっているようであった。

第Ⅱ期：ひきこもりから再登校まで（X年11月～X+1年3月）

11月、A子が登校しなくなった。家庭訪問を主とするほほえみ相談員による家庭訪問が始まった。A子は父親には登校しているふりをしているという。父親が昼食時一時帰宅するときは、自分の通学靴を隠し、息を潜めている。

母親との関係も改善し、調子の良かったA子がなぜ登校しなくなったのだろうか。母親との面接の中で、父親のA子に対する関わり方が、変わってきたことがわかった。母親によると、来年度4月から、A子の父親は中学校のPTA会長を務める意向であるという。そのため、PTA会長の娘が登校しぶりでは格好がつかないということで、A子にきつく当たりだしたとのことである。以前の父親とは逆で、無理に登校させようとするという。また、知り合いのところへA子を連れて行き、「毎日登校し、教室へ行くように」と説教してもらったらしい。これらのことから、父親の急な態度の変化にA子は戸惑い、また、反抗したい気持ちもあるだろうと思われた。

12月、中学校では文化祭が行われる。A子の学級では劇を発表することになった。タレント活動をしているA子にとって、劇でキャストを務めることは学級復帰のチャンスであった。文化祭の練習については担任が中心になりA子と連絡をとった。予想通り、A子はキャストに立候補し、持ち前の責任感の強さから、文化祭練

習時には登校し、学級参加した。A子が登校した際、スクール相談員との面接をした。父親が急に変わってしまったことに対して頭にきているし、相変わらずの父親の母親に対する態度が許せない。具体的には、母が父の分の夕食を作った時、父はそれを食べないこと、A子が両親の分の夕食を作った時、父は母の分まで食べてしまうこと、等である。やっと母親と関係が取り戻せて、A子のペースで学級復帰に向かっていった時期だったため、父親の勝手な態度の変化のためにペースを乱されて、怒り心頭ということであった。しかし、自分はタレント活動の中で、キャストの重要性をよく知っている。練習を休んで周りの仲間に迷惑をかけることは許されない。だから、文化祭の練習のために登校すると言うのである。この文化祭の練習参加をきっかけに、A子は再度相談学級登校と教室参加を始めることができた。

1月、第3回目の援助チームの会議を開き、父親対策を話し合った。なんとかA子の父親と面接する機会を作ることにした。面接にあたって、スーパーバイザーからアドバイスを受けた。父としての教育方針を聴くこと、「一緒に考えていきましょう」と、気持ちに沿った言葉掛けに心がけるなどである。そして、父親との面接で以下のような父親の思いがわかった。父親自身、子供の頃、鍵っ子で淋しい思いをしたこと、A子にはそんな思いをさせたくなかった。だから母親には「傍にいてやってほしい」とA子が小1の頃からずっと話し合っている。しかし、母親はA子よりも仕事が大切らしい。せめてパートに切り替えられないか相談したが、叶わなかった。そういう点で、母親に対してとても不満を持っている。A子もわたしたち夫婦のギクシャク感から不安定になったのだと思う、と言う。スーパービジョンに基づいて、「A子さんにどうなってほしいですか？」と質問すると、卒業式で自分が挨拶するのに、卒業するはずの我が娘が学級参加できないというのでは辛い、できれば学級復帰してほしい、タレント活動がやりたいのならば、普通高校ではなく、単位制のサポート校でも良いと思っている、ということである。このA子に対する思いは、母親のA子に対する

【石隈・田村式援助チームシート自由版】 実施日： 年 月 日(水) 15:00~16:00 第 2 回
 次回予定： 第 回
 出席者名：母親，担任，教育相談主任，スクール相談員
 苦戦していること(学級へ入ることができない)

児童生徒氏名		学習面	心理・社会面	進路面	健康面
年 組		(学習状況)	(情緒面)	(得意なことや趣味)	(健康状況)
担任氏名		(学習スタイル)	(ストレス対処スタイル)	(将来の夢や計画)	(身体面の様子)
先生		(学力)	(人間関係)	(進路希望)	など
		など	など	など	など
情報 の ま と め	(A) いいところ 子どもの自助資源	・相談学級では真面目に学習に取り組む	・責任感が強い ・周りの空気を読む	・高校進学を希望している ・タレント活動を続けたい	・問題ない
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ	・学級に入れないため学習進度が遅れている	・クラスの仲間や両親に気がつかいすぎて疲れている ・父親と上手に関わることができない	・高校とタレント活動は両立できるのか ・保護者の意向はどうか	・時々手や足首に包帯を巻いてくる
	(C) してみたいこと 今まで行った、あるいは、今行っている援助と、その結果	・相談学級に訪れる職員が学習の援助を続けている	・気持ちを言えるようにカウンセリングを実施した ・母親のカウンセリングをすることで母子間で会話ができるようになった	・担任と進路について話した ・保護者の願いを聞いた	・かまってほしいあられかもしれないので、声かけに心がける ・体調不良を訴えることは減った
援助 方針	(D) この時点での目標と援助方針	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、カウンセリングの中で気持ちが言えるようにする ・引き続き保護者のカウンセリングを続け、安定をはかる ・学習は相談学級で援助していく ・保護者の願いを聞く 			
援 助 案	(E) これからの援助で何を行うか	①相談学級での学習の援助	①ストレスを言葉であらわせるようにカウンセリングの実施	①進路についての情報提供 ②進路について話し合う	①体調を気遣う声かけ
	(F) 誰が行うか	①相談学級を訪れる職員	①スクール相談員	①担任 ②保護者	①すべての職員
	(G) いつからいつまで行うか	①引き続き、教室に入れるまで	①引き続き、卒業まで	①折をみて	①引き続き、卒業まで

参照：石隈利紀・田村節子共著『石隈・田村式援助シートによる援助入門—学校心理学・実践編—』図書文化社
 石隈利紀著『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—』誠信書房
 (c)Ishikuma & Tamura 1997-2003

図2 第2回目の援助チームシート

思いとも重なっている。

続いてA子と面接をした。週一度のタレント事務所で、同年齢の仲間にグチを聞いてもらった。他の仲間も、家族のことや学校のことなどで悩んでいることが分かって楽になった。中学校の友達に話すとは引いてしまうだろうけれど、タレント事務所の彼女たちには、何でも話せるという。

また、父親に何と言われようと自分が登校できるときに登校することにしたこと、両親の伝書鳩をやめたことを話してくれた。両親の顔色を窺っていた以前のA子に比べて、「自分がやるべきことをやることにした」というA子は、ふっきれたような表情だった。

第Ⅲ期：自分の思いをつらぬけるようになったA子（X+1年4月～X+2年3月）

中学校では1ヶ月に一度、相談者担当者会議（校長・教頭・生徒指導・養護教諭・特別支援担当教諭・教育相談主任・スーパーバイザー・各相談員）が開かれる。3年生になって校務分掌が代わったため、その会議でA子に関する情報の引継ぎも行われた。一見、明るさを取り戻し、相談学級で勉強しながら教室への参加も増えていたA子であったが、援助チームはA子の外見に惑わされないように、慎重に声掛けを続けた。A子はテレビCM参加・企業ポスターなどタレント活動も平行して行っていた。

6月の面接で、A子は高校への思いを語った。やはりタレント活動を続けたいので単位制の高校へ行きたいこと、母親は賛成しているが、父親は「サポート校に行くくらいなら高校は行くな」と言う。でも父親の言うことは無視するからいい、とのことだった。以前、父親は面接時、「A子がタレント活動を続けるためにはサポート校でもいい」と言っていたため、「高校は行くな。」は母親の意見に反抗して言った言葉と思われた。相変わらず、A子夫婦間の葛藤に巻き込まれている様子だが、「自分の思いを貫くことにした」という強さがA子の決断を支えていた。面接の後、担任にA子の思いを伝えた。学級では三者懇談が始まった。三者懇談に母親が訪れた機会を利用して援助シートに基づく会議（第4回）

を開催した。図3に第4回援助チームシートを示す。

夏休み中、A子と母親は志望校の見学・面接をした。A子の希望どおり、タレント活動との両立が可能であり、通学の便も良いことから、受験することにした。父親は相変わらず反対していて、「普通高校でなければ、学費を出さない」と言っているが、学費は母親が捻出してくれるというので問題ないという。今、A子には母親の支えがあるため、高校受験へ向かって前向きに動き出した。

12月、A子は第一志望校に合格した。その後は毎日登校するようになり教室への参加も増えてきた。スクール相談員との面接では、相変わらず父親への不満を吐露していたが、「まったく子どもだよ、お母さんに対して思いやりがないんだよ」と明るい顔で一蹴していた。A子は「将来への展望」（田村・石隈, 2007）を持つことができたのである。

3月、A子は卒業式を迎えた。A子の父親はPTA会長として挨拶をした。父親の「A子が卒業式に学級参加してほしい」という願いはここで叶っていた。

考 察

援助開始時点では、A子の学校不応適は、学校生活で溜まったストレスを上手く解消できていないことから派生しているものと考えられた。学校内で学年主任、担任、養護教諭、母親との援助チームでA子を支え、家庭で両親による援助が期待されればA子の問題状況は好転するだろうと思われた。

しかし、A子の面接を進めるごとに、家庭内での葛藤が露わになってきた。援助チームの一員である母親が不安定であり、まず、母親を支えることから始めなければならなかった。そこには夫婦の葛藤が絡んでおり、完全に母親の不安を取り除くことは難しいであろうと思われた。A子にとって両親の不和は大きなストレスであることはわかっていたが、いったいどのように手をつければいいのか、そこでスーパーバイザーにアドバイスを仰いだ。「夫婦間の問題

【石隈・田村式援助チームシート自由版】 実施日： 年 月 日(水) 15:00~16:00 第 4 回
 次回予定： 第 回
 出席者名：母親，担任，教育相談主任，スクール相談員
 苦戦していること(学級へ入ることができない)

児童生徒氏名		学習面	心理・社会面	進路面	健康面
年 組		(学習状況)	(情緒面)	(得意なことや趣味)	(健康状況)
担任氏名		(学習スタイル)	(ストレス対処スタイル)	(将来の夢や計画)	(身体面の様子)
先生		(学力)	(人間関係)	(進路希望)	
		など	など	など	など
情報 の ま と め	(A) いいところ 子どもの自助資源	・相談学級では真面目に学習に取り組む ・学級参加が増えてきた	・責任感が強い ・自分の意思を伝えられるようになった ・周りの空気を読む	・高校進学を希望している ・タレント活動を続けたい	・問題ない
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ	・学習進度が遅れている	・クラスの仲間や両親に気がつかいすぎて疲れている ・父親と上手に関わることができない	・高校とタレント活動は両立できるのか ・保護者の意向はどうか	
	(C) してみたいこと 今まで行った、あるいは、今行っている援助と、その結果	・相談学級に訪れる職員が学習の援助を続けている	・気持ちを言えるようにカウンセリングを実施した ・母親のカウンセリングをすることで母子間で会話ができるようになった	・担任と進路について話した ・夏休みの高校見学をすすめた	・アピールすることはなくなったが、丁寧な声かけに心がけた
援助 方針	(D) この時点での目標と援助方針	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、カウンセリングの中で気持ちが言えるようにする ・引き続き保護者のカウンセリングを続け、安定をはかる ・学習は相談学級で援助していく ・保護者へ進路に関する情報提供をする 			
援 助 案	(E) これからの援助で何を行うか	①相談学級での学習の援助	①ストレスを言葉であらわせるようにカウンセリングの実施 ②学級参加への声かけ	①進路についての情報提供 ②高校見学のすすめ	①体調を気遣う声かけ
	(F) 誰が行うか	①相談学級を訪れる職員	①スクール相談員 ②担任	①担任 ②担任	①すべての職員
	(G) いつからいつまで行うか	①引き続き、教室に入れるまで	①引き続き、卒業まで	①②折をみて	①引き続き、卒業まで

参照：石隈利紀・田村節子共著『石隈・田村式援助シートによる援助入門—学校心理学・実践編—』図書文化社
 石隈利紀著『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—』誠信書房
 (c)Ishikuma & Tamura 1997-2003

図3 第4回目の援助チームシート

にメスを入れるのではなく、両親それぞれがA子に対してどのような教育方針を持っているのか、A子にどうなってほしいと思っているのか、に焦点をあてる。」ということであった。スクール相談員はこのアドバイスのもと、両親の面接をした。父親側にかかなりの母親に対する不満があるのがわかったが、意外にも両親のA子への思いは一致していて、その思いはA子の自助資源を後押しする力になった。

また、一時ひきこもり状態になったA子を再度学校へ向かわせたのは、A子自身の「責任感」と「演劇が好き」という自助資源（内的リソース）に基づいたエネルギーに他ならない。文化祭で担任がA子に活躍の場を設けたことは、A子の学級復帰への強い後押し、エンパワーメントすることになった。そこで自信がつき、両親の不和から派生するストレスを乗り越えることができた。そしてクラスの一員であることを実感できたのである。一言で援助チームと言っても、実際に学級復帰する際に中核となるべきはやはり担任であり、学年主任、教育相談主任、スクール相談員や養護教諭はサポーターの立場であることがわかった。中村(2007)も、援助チームなどがシステムティックに対応するためにはコーディネーターの存在が重要であり、スクールカウンセラーなどが初期の段階で担当しながら、段階的に学校内の教師にその業務を移行していくことが必要であると述べている通りであった。教師の方がそれぞれの事例について学校内での調整機能に有利であるからと考えられる。

不登校は、子どもと環境との不適合（折り合いの悪さ）ととらえることができる。一言で「折り合いの悪さ」と言っても、子どもが環境に合わせる力が弱くなって登校していないのか、環境の方がその子どもに合わせる柔軟性がないから登校していないのか、あるいはその両方かもしれない。その子どもと環境のどの辺の折り合いが悪かったかをまず理解することが援助のヒントになる。

この視点を持って、A子の問題状況について考えると、学校生活のストレスのみならず、家庭内での葛藤に巻き込まれてしまったことで、

A子のストレスに対処する能力が低下した。また、A子が一見、しっかりしている明るい生徒だったため、彼女の葛藤が見過ごされてしまっていたであろうことも、A子のエネルギーを低下させたと考えられる。

これらの状況を変えるために、A子自身の力（自助資源）とA子の周りにいる援助者の力（援助資源）を生かした援助を行うことにした。スクール相談員である報告者は、自信を無くしA子から逃げていた母親をA子の一番近くの援助者として取り込むために、面接を通して常に母親を支え、母親A子の理解者となるよう働きかけた。そして、学年主任、担任、養護教諭との援助チームにより、A子の表面の元気に惑わされず、丁寧な声掛けに心がけた。また、A子が週一回通っているタレント事務所の仲間たちの支援も大きかった。

このような援助チームによる援助の結果、A子のストレスに対処する力は相対的に増加し、A子の自助資源であった「責任感が強い」「学業とタレント活動を両立していきたい」という思いが、強くなってきたと考えられる。援助チームの会議の中で、「一人で抱え込まずに済む」「他の人の意見を聞くことができた」「外にもチームとしての援助を必要としている生徒がいる」等の協働の大切さや援助チームの効果を実感する発言が見られた。

不登校の子どもに援助をする時、つい、ストレスの原因の除去・軽減に目が向きがちである。しかし、本ケースを通して、必ずしも、ストレスの原因の問題が解決されなくても、援助チームの援助と本人の自助資源の力で、折り合いをつけて学校生活を送ることが可能であることが確認できた。そして援助チームに保護者が加わるとさらに効果的であることが分かった。保護者は子どものことを一番知っている「自分の子どもについての専門家」である。保護者をただ「援助を受ける者」とだけ捉えるのではなく、保護者の持っている援助力を生かすことが重要であることが分かった。しかしチームによる援助では「多忙で話し合う時間がない」（川口, 2002）、「援助チームを進めていくリーダーが必要だ」（松本・淵上, 2009）等の課題も表れてきた。今

後の大きな課題である。

引用文献

- 秋光恵子・白木豊美 2010 チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響 教育心理学研究 58(1), 34-45.
- 半田一郎・青野勇・足立由美子・田村節子・難波博子・小野瀬雅人・石隈利紀 2000 スクールカウンセラー活用に関する学校心理学的研究(2): 中学校における校内援助チームに焦点をあてて 日本教育心理学会総会発表論文集 (42), 194.
- 平岡永子 2005 小学校における相互コンサルテーションの実際: 不登校女児をめぐる援助チームの形成とその展開 臨床教育心理学研究 31(1), 23-27.
- 平野知見 2008 オーストラリアの多文化保育に関する意識とチーム援助の実態 オーストラリア研究紀要 34, 161-180.
- 石隈利紀・田村節子 2003 チーム援助入門 図書文化
- 川越勝 2008 中学校相談室の運営とチーム援助(2) 日本教育心理学会総会発表論文集 (50), 131.
- 川口恭子 2003 小学校教職員による教育相談活動の実際と問題点 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 12, 33-46.
- 小島弘道 2002 21世紀の学校経営をデザインする: マネジメントとリーダーシップ 教育開発研究所
- 眞野郁子・辻河昌登 2007 通常学級での援助チームによる特別支援教育に関する研究 発達心理臨床研究 13, 119-128.
- 丸山広人 2009 チーム援助活動における情報収集と仮説生成のプロセスについて 茨城大学教育学部紀要(教育科学) 58, 451-464.
- 松本ルリ子・淵上克義 2009 チーム援助による教育相談を通して見えてきたこと: 2つの中学校での実践を比較して 日本教育心理学会総会発表論文集 (51), 349.
- 文部科学省 2004 学校と関係機関等との行動連携を一層推進するために 学校と関係機関との行動連携に関する研究会
- 中村健 2007 不登校児童生徒への支援ネットワーク構築に関する実践的研究: 大阪府A市スクーリング・サポート・ネットワーク事業の取り組みから 同志社法学, 59, 827-849.
- 佐古秀一 2006 学校組織開発 篠原清昭(編著) スクールマネジメント ミネルヴァ書房 155-175.
- 瀬戸美奈子 2010 学校におけるチーム援助のコーディネーションに関する研究の動向 関西福祉科学大学紀要 14, 77-86.
- 瀬戸美奈子・石隈利紀 2003 中学校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究: スクールカウンセラー配置校を対象として 教育心理学研究 51(4), 378-389.
- 田村節子 2003 スクールカウンセラーによるコア援助チームの実際: 学校心理学の枠組みから(教育心理学と実践活動) 教育心理学年報 42, 168-181.
- 田村節子・石隈利紀 1998 教師・保護者・スクールカウンセラーの援助チームに関する学校心理学的研究 日本教育心理学会総会発表論文集 (40), 360.
- 田村節子・石隈利紀 2003 教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開: 援助者としての保護者に焦点をあてて 教育心理学研究 51(3), 328-338.
- 田村節子・石隈利紀 2007 保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか: 母親の手記の質的分析 教育心理学研究 55(3), 438-450.
- 新福知子・篠田晴男・関根たまえ・小野瀬雅人・石隈利紀 2000 スクールカウンセラー活用に関する学校心理学的研究(1): 小学校における校内援助チームに焦点をあてて 日本教育心理学会総会発表論文集 (42), 193.
- 宇留田麗 2004 協働一臨床心理サービスの社会的構成— 下山晴彦(編)臨床心理学の新しいかたち 誠信書房 219-242.
- 山口豊一・吉田香衣・石川章子 2009 中学校教師のチーム援助モチベーションに関する研究: インタビューを題材とした質的研究 跡見学園女子大学文学部紀要 42(1), A61-A73.
- 横島義昭・三浦美智子・山口 豊一・小野瀬雅人・石隈利紀 2000 スクールカウンセラー活用に関する学校心理学的研究(3): 高校における校内援助チームに焦点をあてて 日本教育心理学会総会発表論文集 (42), 195.